

金など実物資産の価値高まる 不測の事態に備えた取組み継続を

空条 円
Madoka Kujo

日本のことを「黄金の国・ジパング」と呼ぶようになったきっかけは、十三世紀後半にアジア諸国を旅したイタリアの商人、マルコ・ポーロが伝えた旅行記『東方見聞録』とされる。元（モンゴル帝国）に長期

滞在中、十二世紀初頭に東北の平泉に建立された中尊寺の金色堂の話などを聞き、日本の宮殿の屋根はすべて黄金で造られ、床には分厚い黄金が敷かれているなどと誇張して描かれたようだ。ゴースト・ライ

ターがいた可能性も示唆される見聞録だが、当時のヨーロッパでは東方の島国をユートピアのごとく人々に憧れを抱かせ、やがて訪れる大航海時代（十五〜十六世紀）に向けた

海時代（十五〜十六世紀）に向けた機運を高めるなど、歴史的にも大きな影響を与えている。

三菱マテリアルの金関連のウェブサイトにによると、金が発見されたのは今から七、〇〇〇年前とも八、〇〇〇年前とも言われ、当時は金鉱石から金を取り出す精製技術はなく、川の砂金や山などで露頭の自然金の形で発見されたようだ。

人々を魅了してきた黄金が歴史上、精製・加工されて世に出てくるのは、古代エジプト王朝時代（紀元前四〇〇〇〜同三三二年）。権力者のファラオ（王）たちは、主神である太陽のシンボルとして金を崇拜し

ており、やがて金は「富と権力の象徴」としての意味も併せ持つようになる。何ものにも侵されない性質を持つ金をファラオたちは死しても手放すことはなく、自らの不変不滅を祈って黄金のマスクをつけ、黄金の棺に入り、黄金の装身具に囲まれて永遠の旅に出た。有名なファラオの一人、ツタンカーメンの黄金の棺は、約一トンの重さがあるという。

古くから世界各地で貨幣としても使われてきた金。金属や貴金属はコインに加工すると、持ち運びやす

く、貯めやすい。特に金は見た目の美しさや希少さに加え、やわらかくて加工しやすく、さびにくいといった特徴を持つ。

金山開発で土木技術磨く

時代や国が変わっても、変わらない価値を持ち続ける金貨は、各地で盛んに活用されてきた。現在見つかっている世界最古の金貨は、紀元前六七〇年頃のメソポタミア時代に栄えたりディア王国（現在のトルコ西部）で造られた「エレクトロン貨」とされる。直径一センチ強の円形で、表面には王の象徴であるライオンの顔が刻まれている。

して以降、様々な金貨が造られてきた。有名なものでは、時の権力者である豊臣秀吉が天正一六（一五八八）年に造らせた、日本最大の金貨として知られる「天正長大判」がある。一枚当たりの大きさは縦一七センチ、横一〇センチ、重さは一六五グラム。

これほど巨大な金貨は持ち運びが不便なものも当然。日常的な通貨ではなく、手柄を立てた家臣への褒美、親しい人への贈り物として使われたようだ。

国内で金山開発が活発になったのは戦国時代とされる。政治体制が大きく移り変わり、混乱の世の中で諸国の大名にとつての重要課題は政治力と軍事力の強化。それをなすには潤沢な資金が求められた。

数ある武将のなかでもいち早く金銀に目を付け、金銀を有効活用した人物として思い浮かぶのが武田信玄だ。「武田の甲州金」で知られる金貨を鑄造し、富国強兵に取り組んだ。金山開発は土木技術の研さんにも貢献し、治水対策を目的に整備された「信玄堤」もその成果の一

つであり、領民の安心・安全な暮らしを守ってきた。

十七世紀前半には世界の金の約一割を生産していたとも言われる佐渡島（新潟県佐渡市）。世界の他の地域で機械化が進む十六世紀末から十九世紀半ばにかけて、伝統的手工業による生産技術を極限まで高め、機械工業に比肩する大量かつ高品質な金生産を実現した「佐渡島（さど）の金山」が七月、世界文化遺産に登録された。

文化遺産の構成資産は島内にある西三川砂金山、相川鶴子金銀山の二つ。江戸時代の坑道の様子などを見学できる観光施設を運営するゴールデン佐渡のウェブサイトに「史跡 佐渡金山」によると、開山は一六〇一年とされ、資源枯渇のため一

九八九年三月に操業を休止。佐渡金山の金鉱脈は東西三、〇〇〇メートル、南北六〇〇メートル、深さ八〇〇メートルに広がり、江戸から平成までの三八八年间に産出した金は七八ト、銀は二、三三〇トに上るといふ。

日本最大の金銀山であり、掘られた坑道の総延長は約四〇〇キロに

達する。韓国からは強制労働問題を巡って抗議の声も聞かれたが、両国が歩み寄って今回の遺産登録へと至った。

令和のブラックマンデー

金はそれ自体が価値を持つ「実物資産」であり、資産として認められてきた歴史のなかで無価値になっ

たことがない。預貯金や株式、債券など紙の資産は、発行企業や発行国の信用、業績などで価値が決まるため、世の中が安定し、経済が好調な時には価値が上がりやすい。逆に世が乱れて景気低迷が続くと価値

が下がり、発行元の財政・経営破綻によって無価値になることもある。価値が安定し、現金化しやすい金。投資家目線では世界情勢の変化に強く、株安や紛争、テロなどが起きると安全な資産として金を買う人が増え、その価値が更に高まる。ロシアによるウクライナ侵攻や中東の紛争などが長期化するなか、安全資産とされる金の価格は歴史的な高値圏で推移している。円安な

ど為替の影響もあって一ダウ一万円台が定着。先行きの不透明感が増し、不測の事態に備えて金を購入する動きが若年層にも広がっているようだ。

資産防衛の手段として、金の価値は一段と高まる見通し。八月五日の東京株式市場で日経平均株価の終値が四、四五一円二八銭安と大暴落。一九八七年十月の「ブラックマンデー」を受けた下落を超える歴史的な下げ幅を記録した。翌日は一転して買い戻しが入って終値が前日比三、二二七円〇四銭高で、過去最大の上げ幅となった。

世界経済に大きな影響を与える米国の景気が減速することへの懸念は根強く、株価上昇をけん引してきたAI・半導体関連市場への過剰な期待なども歴史的な株価の乱高下の要因とされる。金など実物資産のように安定した価値あるものによって、将来の危機に備える。価値ある社会インフラや建築物を整備し、健全な形で維持し続けることも、安定した社会・経済のために欠かせないものであろう。